

報告タイトル

統治イデオロギーを支える無法の暴力 —インドネシア・スハルト体制の検証—

“Governing Ideology with Extra-judicial Violence: An Analysis of Suharto Regime in Indonesia”

氏名(所属)

今村祥子(同志社大学 嘱託講師)

IMAMURA Sachiko (Doshisha University)

要旨(800字程度)

インドネシアでスハルト体制が崩壊してから20年以上が経過した。制度的な民主化が着実に前進する一方で、現在のインドネシア政治の非自由主義的(illiberal)な性質を多くの研究が指摘している。国家権力を法で縛り、国民一人一人を守るリベラル・デモクラシーの要素が、民主化後に重視されているとは言いがたいためである。本報告は、非自由主義的と指摘されるインドネシアの国家と社会のあり方を説明するためには、いま一度、スハルト体制が作り上げた国家・社会関係に立ち戻って分析する必要があると考える。なぜなら、民主化後のインドネシアでリベラル・デモクラシーを否定する勢力がしばしば援用するのは、スハルト体制から引き継がれたかのような「国家と社会の調和的一体性」、インドネシアの伝統的価値、叡智に導かれた民主主義といった概念だからである。では、スハルト体制は国家と社会の関係をどのように定義し、それをいかなる統治手法で実現しようとしたか。これが、本報告の問いである。

この問題を考察する上で本報告は、第一に、スハルト体制が強力に浸透を図ったパンチャシラ・イデオロギー、第二に、それを支えた国家の暴力に焦点を当てる。スカルノが提示した国家原則パンチャシラは、スハルト体制下では国家と社会が一体であるとするイデオロギーの根拠として利用された。だが、国家と社会の調和的一体性とは、言わば虚構に過ぎない。そこに内在する矛盾を克服するために利用されたのは、国家の暴力であった。そこでは国軍の暴力のみならずごろつきの暴力が動員され、さらに一般民衆の暴力性を意図的に扇動し解き放つという手法も利用された。社会勢力をも利用した暴力のあり方は、国家の暴力と自然発生的な市民の暴力との区別を曖昧にし、これが国家と社会の一体性という虚構の矛盾を覆い隠す作用を持った。このような国家・社会関係と暴力のあり方を、事例を通して考察したい。